岡本韋庵『北地国防論』『北地海防論』について（下）

有馬　卓也

目次

はじめに
第1章　『北地国防論』『北地海防論』の主張
　第1節　西欧の東洋侵略
　第2節　千島・対馬・八重山の現状
　第3節　侵略への対応
　第4節　その他
第2章　『北地国防論』翻刻・訳註（以上前集）
第3章　『北地海防論』翻刻・訳註
おわりに

第3章　『北地海防論』翻刻・訳註

【凡例】

一、該本は徳島県立図書館蔵。目録番号は五一二。
一、該本は漢字片仮名交じり文で筆記してあるが、漢字平仮名交じり文に改めた。
一、旧字・俗字は原則として新字に改めた。
一、句読点・「」・『』を施した。
一、墨筆訂正が加えられている。本稿では訂正後の文を翻刻した。
一、原本の文字が判読不可能な部分は●で表記した。
一、読みやすくするために適宜ルビを付した。なお、岡本がルビを付した文字については注記した。

岡本韋庵『北地海防論』

英露が贏輸（えいゆ）〔1〕を争へるの結果は我国に於て活劇を現せんとす。高枕安眠すべき時に非ざるなり。吾儕が千島の義挙を企つるも、是等

のため杞憂を抱けるに出でて、報国といふ一片の精神に外ならず。必しも一身生活の地を求め、人の為すこと能はざることを為して名利を博せんとには非ず。然るに之を有力者に訴ふれども、未だ応ずるものなく、秦人が越人の肥瘠を視る〔2〕に類するものあり。靴を隔てて痒きを掻くの憾みなきこと能はず。有力者が後世子孫のために遠慮することなしといふは信ずべからざるに、斯く冷澹なるものは何の故ぞや。四彊の防禦十分なれば、千島のみを無人の域に附するも妨げなしとするか。或は他に急務あるがため、千島に及ぶに暇あらずとするか。対馬・大島は東洋第一の咽喉にして、全国の要害と称す。内外の事情に於て最も急務たるものの如し。是余が対馬・大島を視て、今日の急務を探察せんと欲する所以なり。余が千島に拘々たる〔3〕は一偏に僻したる意見ならんも知るべからず。余が分として更に務むべき急務ありとせば、争か己を捨てて人に従はざらんや。余は千島を急なりとする心に堪へざれど、姑く対馬等を探問して、後日の参考に資し、偏く世人にも問はんと欲す。人の余が誠ならざるを譏らるるものあるは、固より甘受する所なり。

露国陸軍参謀官オリオノフ氏が『一島未来記』に対馬の未来を論じて、独逸人が此島を得まく欲する志あるを細述し、露国の嘗て此島に占拠して之を放棄したるを恨めるが如き説も見えたり。一島とは即ち対馬の事なり。其説に曰く「対馬島タタムラ湾は本島の西方より島地に闖入〔4〕して殆ど中央に至り、四個の大湾を成し、各湾数個に分れ、各数隻の舩艦を碇泊するに便なり。本湾は一国の軍港に充つるのみならず、数海軍国の碇泊場を撰ぶに当れば、此湾こそ極点に屈しせらるべきなり。島内日本人及び小数なる朝鮮人の村落あり。此島は千八百六十八年、日本維新改革前まで半独立なる対馬侯に附属せり。千八百六十一年、我軍艦ボサットウニック号は八月間タタムラ湾内オオセ浦に碇泊し、倉庫・職工場・蒸汽浴場・官舎等を建築し、且つ菜圃を墾き、該圃より隣村ヒラスクに至るの道路を開設し、我海軍測量士官は天象学に基づき本島の位置を定め、其内外部の沿岸を調査し、諸港湾を測量し、殆ど余す所なきに至れり。此時に当り対馬侯は領地の小部分を我に割与せんとするの勢ありき」と。又曰く「対馬島は仮令ひ一時朝鮮人が主権を主唱せりと雖も、本島領主の自ら好みて皇帝の藩臣と称したると島内日本人の巨多なるとの実事に由りて見るに、本島の主権に関する問題は総て争論外の事と云はざるを得ず。日本維新前には対馬侯は封建諸侯の権理を有する半独立の領主なり。廼ち領地内の小地区を割きて我が露国に附与するなど、蓋し其権に係るものといふべし」と。又曰く「我が敵対者にして対馬を専領せば、我海軍の支那海に出入するに必由にして、最近なる航路を閉鎖し、我が為に広濶なる日本海をして殆どバルチック海及び里海〔5〕の如き蔽塞したる地形と一般ならしめん。敵人の我が浦潮斯徳港及び南部烏蘇里地方に向ひて進撃を試みんとするに当れば、該島は砲兵木廠となり、糧食器具の貯蓄場となり、軍隊の本病院となり、最上安穏なる根拠の地たるを得べきなり」と。是等は対馬の要害を論じて的当確切なるものといふべし。対馬侯が領地を割与せんとすといひ、朝鮮人が主権を主唱するなどいふが如きは、極めて粗漏なる言なりといへども、魯人は直に斯の如くに思ひたるならん。彼が新聞紙にも国旗を一たび千島に翻したることもあれば、我が所有たる地に相違なしと明記せしものなどありといふ。柯太の四千年前より北倭の地〔6〕たるは支那人の伝ふる所たり。我が国境の黒龍江の北に始まり済州の南に至れるは、朝鮮人の称する所たるにも拘らず、強て己が有たるを主張して、徳川

氏を恐嚇したると同一の手段に非ざるはなし。徳川氏が吏人の無学にして遠識なきは柯太を失へる禍を醸したる所以にて、今は誨ゆとも追ふべからず。我が陸海軍人は露人の情を洞察し、十分に警備せらるることなれば、対馬沿海の如きは既に間然〔7〕すべきものなかるべしといへど、我国臣民たるもの陸海軍に其人ありとして念頭に関せずとせば、不忠の責を免れがたし。我が西北に対馬ありて東北に千島あるは、之を人に譬ふれば兄弟の如し。対馬は兄なり、千島は弟なり。弟を訪はんと欲して兄を顧みるは情性の然らざるを得ざるに出づ。是余が対馬を一見して他日に至り千島と応援し父母を保護するの策を講ぜんとする所以なり。

余嘗て琉球の属地なる八重山列島中に林莽穢雑して人跡の至らざる所多く、内地数万の人民を遷して其地を拓開し、砂糖等を耕作するときは漸く莫大の利益を起すべしとて、老友佐賀県の谷口藍田〔8〕が男復四郎〔9〕の其事に尽力したるを聞き、復四郎と議して企図したる集義館雑記の序に其説を掲げたることあり。復四郎は間もなく死し、其事も中絶したりしが、是も国人の軽視すべからざる所たるを感ぜしがため、今春千島に赴ける際に一詩を賦し、「北海難忌九世仇、南湾須画百年謀、浮縄西去三千里、淡水東頭古帝洲」といひて、其志を陳したることありき。他人の此事に従事せんことを欲するに外ならず。頃ろ肝付兼行〔10〕君が八重山島の話といへるを見るに、八重山は十四島にして三十七方里四々あり、宮古は八島にて十四方里八四あり。八重山列島を以て内地の離島に比すれば、対馬の下淡路の上に位するほどなれど、其人口は明治二十年の調にて二万四千五百九十四人に過ぎず。極めて無気懦弱の風あり。農桑牧畜の如きは女子に一任し、男子は之を顧みるものなく、漁業に至りては曾て為さざるのみならず、全く漁業といふことあるを知らず。全島に漁交あることなし。彼等の眼中には海産物を見ざるものの如し。是は海岸四周に石花〔11〕充満するがため、捕獲に便ならず、捕獲するにも石花のため一種の悪臭を帯びて食料に供しがたきゆえなれど、海岸より一里の外に至り、石花囲統の処を離れて魚を釣るときは、豪も臭気を帯ぶるものなきを知らざるなり。又農作あるも極めて迂に、八重山全島にて米五千石とを獲るに過ぎず。是は肥料に乏しく、各年に地を易て耕し、下種するも最初のみ僅に手入し、其後は一度も手入することなきがためなりと見えたり。重野博士〔12〕が話にも、大島などにては魚を釣ることを知れども、網を撒つことを知らず、大島は湾中に●ある場処にて鯨鯢の游泳するなど極めて多ければ、鯨猟に於て最上の場処なるべしと言はれたり。果して然りとせば、琉球諸島も千島無人の境と同一の観あるに非ずや。漁業は海軍を講習する第一にして、殊に千島の漁業は千島の海軍を養ふべく、琉球諸島の漁業は琉球諸島の海軍を養ふべしと思ふほどなるに、此の如き状あるは、外国に接して国威を耀すの術に非ざるなり。我が国内有志者が辺疆のため奮進しかねたる情実を察するに、国家の急務とすべきものの千島に在るか、琉球諸島に在るか、常に採択に苦み、断定すること能はずして着手に見合したるに非ずや。余は国防より論じ、公益上より論じて、千島に専なるものなりとはいへど、姑く九州地方に向いて之を窺ひ、有志者の方向を断定するの一考に供せんと欲するなり。

古より国家の大事とするものは戦争より大なるはなし。況や今日の世界に於てをや。今日に当り敵国外患の目前に迫るを見ながら、袖手旁観〔13〕すとせば、争か国に人ありといふことを得ん。況や内に敵勢を誇翊〔14〕し外美に心酔して人心を動揺する姦細蠹賊〔15〕の横行

するものあるに於てをや。東海に孤懸し天険に跨有〔16〕し、四千万同胞の群居するは、荒を併呑し宇内に雄飛するの資なり。敵国外患に於て何か有らん。敵国外患を幸に国人を一致することを勉めずとせば、何を以てか之を一致することを得ん。国内に党を立てて互に猜疑軋轢し、之がため家財を蕩尽し、党員を挙りて共に斃るに至り、一毫も国に裨益すること能はざるに、曽て省覚せざるが如きは、古今東西に其例多し。亡国敗家の術に非ざるはなし。我邦今日の世界にして斯る輩のあるべきに非ざるは、疑を容れざる所なりといへど、敵人の四辺に出没して莫大の利を横奪する実状なるに、【(明天子の寵任を辱うしながら)恬然として怪まず、漫然として顧みず、他人が辺疆のため尽力するを旁観して、陰に冷笑し(て高処より見物し、一)世人に向ひて名利のため狂走するの徒たるを広告せんとするが如き一種の人物あり。人をして国家のため勤労するは一身の汚辱を致すなりとの感を抱かしむるものは、果して何の理由ありて然るか。顧ふに余輩が誠意の貫徹せざるに外ならざるべきも、其人の国に報ずる精神に乏しく不忠の徒たるを免れざるを悲むなり。〔17〕】余は固より拓地の任に堪るものに非ずといえど、徳川の末世より今日に至るまで他人失敗の跡を見聞したることは極めて多し。此弊を矯めんには月俸を仰がずして耕漁の労に服し、各自に奮励するの失少きものたるを認むるのみ。是にて遺●なしといふには非ず。因て対馬等に向ひて漁業を訪問し、大に北海と異なるものを察し、実際の人を得て余が所見を質問し、併せて其人の為す所に倣はんと欲す。庶くば余が志を行ふに裨益あるべきなり。千島の漁業は北海の慣例に由らざるを得ざる所なれど、北海漁人の方法は一の師法とすべきものあることなるが如し。進取の志に乏しく、外人と競争するに堪へざるに由れり。九州地方は古より好みて遠洋に航し、漁業に長じたりと聞けば、意外の参考に供すべきものなしといふべからず。是余が彼地に赴かざるを得ざる所以なり。

我邦は四面みな海なり。海利は陸産に十倍するものと聞けり。而して我近海に漁猟の利多きは万国人の斉しく垂涎する所たり。苟くも国権をして海上三里外に及ぶものとせば、我邦疆域の広大なる如何ぞや。況んや三里外に非らざるに於てをや。国益の盛大なる勝て言ふべけんや。国に余財なく、堅艦大舶を備ふること能ずとするも、房総押送船の如き風浪の険悪を凌ぐに足るものあり。五島・壹岐の捕鯨船なども用うるに足らん。若干万円を房総・能越已北漁民の志あるものに貸して千島の各処に至り、若干万円を天草諸島漁民の志あるものに貸し琉球諸島に至りて漁業を営ましめ、無数の魚介を得て内地人の食料肥料に供し、其余を支那諸国に運往して之を売却すとせば、果して何如なる観を呈すべきや。運送には西洋形の帆前船を用いるに如かずといへど、物品の各地に貯蓄せるを知らば、内地商船の其処に輻湊〔18〕せざるを患へざるなり。最初より官船を貸し、夏季は千島に向ひ冬季は琉球諸島に向ひて、人貨を運搬せしめたらんには、尤も成功を奏し易かるべし。資本金の如きは年を逐ひて反償せしむべし。経験習熟せる漁人に命じて其業を董督〔19〕せしめ、姑く慣用し来れる漁具等を備へて漸く其地に永住せしめ、俄に外国に漠擬し巨金を費さざるやうに注意したらんには、五年を期して償却すること能はざるの患あるべからず。支那上海・漢口等の所にて販鬻せんには一区の地基を買ひ、日本町を置き、邦制粗造の家屋を営み、我が旧来の衣食に甘んじ、愛敬信義を旨とし、老成人もて監督し、一毫も倨傲不遜の挙動あるを許さず、零細に売却して彼が風俗人情に適し、什一の利を逐ひ、多人の生活を謀らんことを要す。是等のためには有志の人に一会を結ばしめて、

開国協会とか励業義社とか名づけ、耕漁商販の実業に就て緩急軽重を講じ、利害を点検して全国人民が奮発有為の精神を鼓舞せしめ、官よりも保護を加へ、卑近の実業もて外に向ひ出稼せんとし、確乎たる見込を立てて入会し、周旋を請ふものあるいは有力者を募りて賛成せしめ、官に訴えて採用を乞はしむるやうにしたきことなり。世には殖産興業のため、経国利民のため、会社を結ぶもの多し。理論を聞くときは極めて高尚なるも、実際に経験したることなく、学校を設け人物を養成するなど極めて文明の象を呈すと雖も、曽て実益を興すに足るものなし。此の如きは新聞紙の種となり、虚名を一時に博するに過ぎず。農学を修めて農事に疎く、商法を講じて商業に達せざる如き、其人は極めて多しとす。最初より此会なきの憂なきに如かざるなり。世に真の国益を奨励し、人をして生理に励みて倦まざらしむるが如き会社ありとせば、千島義会の如きも此に属して指麾を仰ぎたきことなり。八重山諸島の為にも義会を設けて此に属せしめたきことならずや。長崎対馬の諸所には琉球諸島の事を伝聞して、斯る実業に感を抱けるものなしといふべからず。余は其人に就て津を問はん〔21〕と欲するなり。

百万金を費して東京市中に石室数宇を建営するは、千島の幌藻後に拠りて茅屋万家を列するに孰れぞ。東京なる不急の土木は石室に止らず。且夕に粉更〔21〕して費を成すこと極めて夥し。況や礼楽の説に托し酔歌乱舞して無用に散財するなど、弊竇〔22〕の測るべからざるものあるに於てをや。夫れ〔23〕奢侈は一時の融通となるべきが如しといへど、後日に利益を生ずる目的なきものは一般公衆の奢侈を長じ、亡国の基となるものにて、溝壑に棄てんに如かず。世人が桀紂幽厲〔24〕を咎むるも此がためのみ。桀紂の驕奢暴虐は一己の情慾を肆にするに出でて、毫も世に裨益することなく、国力衰弊するに由り、終に滅亡を致せるなり。桀紂の玉杯象箸は今日の奢侈に非ずとて、箕子が簡陋を嘲けるものあり〔25〕といへど、奢侈を以て文明の兆なりと認め、衣食住を外国に模擬し、喪祭等に奢僭を極めて慮美を衒ひ、虚声を張り猿の人真似するが如くにし、外人に及ばざるを耻づるものは、文弱怠惰の弊に陥りて文明の実を知るものに非ず。此の如くにして国家を亡せるものは、東西古今に其例も少からず。斯る輩は外物のため心を労すること甚しく、好みて他人の奴隷となるものあり。斯くて終に敗亡を致すことを知らず。いはば桀紂が欲を擅にしたるに比して、尤も鈍劣なるものたるを免れがたし。悲まざるべけんや。人或は古語を誦して困窮を士の常なりとし、困窮に非ずば人をして事業に奮発せしむるに足らずと説くものあれど、是は堅忍不抜の志節あるものと紈袴〔26〕子弟の驕逸に耽りて、一事を為すこと能はざるものとのために語るのみ。苟も窮鬼に撃ち勝つの精神に乏しく、外美を競ひ散財して、今年の負債を明年の所得にて償はんとするものの如きは、終に心思を労し鬱悶懊悩して、国家の義務に応ずること能はざるべし。

【海陸軍士官などの中には服粧の費多きがために苦心し、後日の栄達を幸に月給を抵当にして高利の金を借用し、財主のために束縛せられて困窮に陥り、甚しきは逃亡して跡を隠すものなどあるを聞けり。斯くては忠義の節を講じ廉耻の節を養ひがたかるべしと思はるるなり。勝て嘆ずべけんや。〔27〕】鉄道・汽船・砲銃の急務なるが如きも、外債を募りて此に従事すとせば、既に成るの後に之を償却するを苦まんとす。或は土地を割て外人に謝せざるを得ざるに至り、強国の束縛を受くるもの多し。学校・病院の盛麗を極めたるも、治療・教育に其人を得ざれば、実効あること能はず。大半は埒もなき玩物となるべし。其の聞見に誇りて誠実に足らざればなり。学者が世道に裨益すること

能はず事実に迂闊なるは、漢学といひ洋学といひ一般の通患にて、吾人と同じく三百文の価値あることなきものなるに非ずや。況や不急の工本を事とし、衣食の人に如かざるを恥づるに於てをや。世人の鎌倉の時代と徳川氏初代との如きを評して蛮鄙なりと評するものあるべけれど、余は今日の世界に在りて北條泰時・徳川家康一輩の人物あるを見ざるを恨むなり。彼が動作は今日より見れば如何にも蛮鄙の風あるを免れずといへど、勤倹の実なるは師とせずばあるべからず。今日に在りては陸海の物産も極めて夥しきことなれば、錦衣肉食も強て之を禁ずとせば、有無を交易し貧富を融通するの道理に違ふべしといへど、勤倹の志は暫時も油断せず、務めて自力もて獲たる金額の内にて生計を治めて幾分の儲蓄を存し、国内にて生じたる物品を衣食して、外国を仰がざることは勢の能くすべからざる所なれど、俄に強国の真似したらんには謂はゆる苗を揠て長ずといふが如き害なきこと能はず。国内に専業を獲たるもの多からず、文化の高明に達すること能はざるに由れり。察せざるべけんや。凡そ事の不急なるものは、一身一家の始末といへど、衆人奢怠の念を生じ、国家の乱敗の源を醸すべき分子たるを察して、撙節〔28〕せずばあるべからず。安ぞ事の緩急軽重を問はず妄りに●消することを得んや。世人往々に奢僭を事とし、分の為すべからざるを為さずばあるべからずとし、意気揚々として肥馬に跨り市井に行歩して婦児に誇示するものあり。此風は東京に於て尤も甚しとす。維新後に帝都を東京に奠められしより、全国人士の此に輻湊するもの日に多く、書生・俗吏を始め僧尼・巫祝・奴隷・乞丐〔29〕・車夫・馬丁に至るまで、東京を以て出身の前途とせざるはなく、此に住して富貴に日を送るものは子孫万世の業なりとしたるものの如し。徳川末世の殿様流義に非ざるはなし。誰か知らん、青山・谷中の墓地も今日に至り既に骨を埋むる余地なきを。誰か知らん、米人黒爾理が品川洋に来りしときに上下狼狽、失錯して田舎に逋逃せんとし、祖宗の遺法に違ひ、彼が国書を受取り城下の盟を成したるは、徳川氏滅亡の基を致したるものなるを、余が相識の紀人柏木常雄は東京を直に敵に接する場処なれば、皇居に適せずとて死に至るまで四方に走奔して其説を主張し、老友森重遠〔30〕は甲信の地を経歴し甲府を中京と定めたき談を主張せり。何れも国家万世のため深く慮れるものといふべし。国中の人心土崩して一致協同すること能はざるときは、砲艦の精修せしものありといへど、実用の功を奏しがたかるべし。利器は人心の一致に如かず。孟子が「可使制梃以撻秦楚之堅甲利兵矣〔31〕」といはれたるも、上文なる平素教養の修れるに由りて上下一致し、敵人の間すべからざる根本あるがためなれば、全く迂闊の言に非ざるなり。察せざるべけんや。今日議会に於て経費を節減するの説あるは、此に慮ることあるがためなるべし。維新以後に外債を致せること日に多しとの風聞あるに拠れば、之を償完するを期し、全国人民を挙りて何事にも●●を要し、無用を祛き、不急を後にすべきは言ふまでもなきことにて、議会諸君が国家のため尽力せらるるほどは感服せざることを得ざるなり。されど毛を吹き疵を求め、強て議論を●し、一私を起すことを知らず、偏見を主張して国防上の緩急を講ずること能はずといふが如きは、古今の通患にて政術に達するものに非ず。勢一たび変ずることあらば、非常に散財するを奈ともすること能はざるものあらんとす。故に善く理財を言ふものは、無益には一銭を惜み、有益には万金を惜まざるなり。北海道に七千万円を用いて事業の挙らざるを咎め、千島を棄てて顧みざるが如きことあれば、羹に懲りて膾を吹くといふに異ならず。余は未だ議員諸君が国防上に急を説くもの

あるを聞くことなし。対馬は春日艦の如きものあれば既に敵艦の侵入を防ぐに足れり、千島は姑く論ずるに暇あらずとするか。甚だ不審に堪へざるなり。余が対馬・大島に赴くは、彼地の人心と国防の緩急とを察して世人に訴へ、国是を決定せんことを祈るに在り。病の在る所に従て治療を施さんとするものと一般なり。余が陋劣なる何ぞ上医に擬することを得ん。されど世に辺疆の病あるを問ふものなしとせば、漸く脚気・衝心〔32〕等の患なしと言ふべからず。此患は余に於ても免るべからず。況や後世子孫をや。是余が大声して世人に問はんと欲する所以なり。世人は余を狂せりと呼ぶものあるも、余は却て其人の中風・麻木〔33〕の病に呻吟するを悲しむなり。

方今我国四民の中に衣服を典質し田宅を公売して身代限を告ぐるもの日に多く、困窮も漸く極点に達せんとするものの如し。世には未だ極点に達せざるがため、実際に奮発すること能はずと説くものあり。斯く安心して打過しなば、国家の滅亡は歳月を期して待つべきなり。況や国内生齒〔34〕の夥しき、年々数十万を増すに至りて、土地に衣食しがたく、何様に労働すとも飢寒を避くべきの術あることなきに於てをや。之を牧済〔35〕せんとならば、周憲王が井田の遺意に倣ひ、各村落の間なる若干町歩の田土を別にし、公衆に諭し彼此に損害なきよう示談を尽くし、旧来私有せる田地と交換して共有の義田とし、一家ごとに老稚二人を養ふことを得るの割合に区域を画し、力を通して耕種し、収むるを計りて平分し、鰥寡孤独をして飢寒の患あることなからしめ、且へ収納穀物一石の中より二三升を出さしめ、之を売却して積立金とし、不意の災難に●れる窮民に貸与し、年を逐ひ薄利を徴して返納せしめ、身代限などあることなからしめんに如かじ。されど土地は限ありて人の生ずるものは限りあることなければ、是にても永世を維持すべきものとはいふべからず。此より外には他国に向ひて移住するの一策あるに過ぎざれど、彼等は固より資力なき族類なれば、耳に南北亜美理駕・澳斯多理等の豊饒なるを聴くも、意の如くに徙住すること能はず。他人の財本を仰ぎて移るものは奴隷の身たるを免がれがたし。幸に北海道の曠漠なるあり。気候物産みな吾人に適せり。其地に徙住して耕漁の労に服せば、数年を出でずして衣食の資を裕にし、子孫を長育することを得ん。安ぞ便法を設けて之を奨励せざるべけんや。方今壮士などと称して都邑に徘徊し、激論を逞うして腕力を試みんと欲するもの多し。各政党派のため救育せられ、飢寒を凌ぎ纔に無事を保ちたりといへど、政党のため狂奔して財産を蕩尽し、後悔を致せるものなど漸く多く、党魁たるものも異人の始末に困却し、言を彼此に托し労費を免れんとす。中には益勢を張りて屈せざるものありといへど、己が命脉たる財産の維持すべきなく、斯る狂人を養ふこと能はざるに注意せざることなれば、終に相共に斃れて止まんのみ。争か勝を其間に制し声名を一世に博することを得ん。小児の閙中〔36〕に戦ひて互に大敗を致せるが如き奇劇を呈せんのみ。此時に至り彼の壮士どもは衣食を得べき地なく、或は社会党の説を主張して貧富を平均せんとする輩も多かるべく、終に一国を挙りて修羅夜叉の世界となり、収集すべからざる勢に至らん。其禍たる勝て言ふべけんや。況や外国のため屈辱を極めて毫も気を吐く能はざるは乱人に口実を仮して暴挙を逞せしむる所以なるに於てをや。大兵もて追討するも争か此輩が貧民窮士を煽動して四方八方より続々蜂起する勢を抑圧することを得ん。其時に至れば外人の力を借りて鎮圧するの策を講ずるものあるべく、外人を恃みて乱略を縦にするものあるべし。是は実に皇国未曾有の大乱となるべき恐れあり。察せざるべけんや。敵国外患

は全国の人民を一致団結せしむべき第一の良薬なれど、正義の在るに任せて死地に入る覚悟なく、因循怠惰して一時の苟安暫楽〔37〕を貪り、外に向ひて毫も進取すること能はず。或は進取するも寸進尺退と言ふが如くならんには、人心鬱結憤激して之を他処に漏さんとす。決して無事を保つべきに非ざるなり。余は徳川氏の末世に当り、世に激徒多く腰に長剣を横へ口に古詩を吟じて街衢に横行するもの、都邑に充満するを見て天地否〔38〕の世界なりとし、北海に徙して永住人とし、其処を得せしめて地天泰〔39〕の世としたきものなりとて幕府に上書すること数回に及びたることありき。余が言の行はれざるは幕府の斃るる所以にして、国家の不幸には非ずといへど、北辺の藩籬〔40〕は長く修まらず、一新の後に及び終に露人の要求を聞て柯太を割与せざるを得ざるに至れり。幕府をして名分の存するに従ひ、奮発して大義を万国に貫徹せしめ、勢の強弱を見て進退し、徒に媚を外人に呈し一時の無事を僥倖〔41〕するが如き惰弱千万の措置なからしめば、国内の人心も活発有為の精神を失はず、四辺に向ひて進取し、今日に至るまで外人が治外法権の束縛を受たるが如き弊はあるまじきに、目前の小康を貪りて永世の大計に昏く、伊弉諾大神が生み成したまひ東海に並列したる同胞兄弟の柯太島を北門の大患なりとし、脱疽〔42〕の全身に禍せんことを畏るが如く、或は厄介なる長物なりとし、全島の海底に沈没せんことを欲するが状なりしこそ情なき始末なれ。政府の顛覆するに至るまで彼地を棄つるに忍びざりしは気の毒なる情実なれど、一跌して回復すべからざる禍を後人に嫁がしめたる罪は、万世に亘りて免るべからざるものたり。維新の初に至り西郷隆盛は身を以て北海に赴き万里の長城となり、露人と一戦して大義を表白せんとしたる〔43〕由なりしが、言行はれずして征韓論となり、台湾の役となり、肥前・長門の暴挙となり、西南の戦乱となり、終に其身を斃すに至れり。是も幕府の余毒を蒙りて此に至らざるを得ざる勢なりしなるべし。大遺憾といはざるべけんや。今日の世界は幸に無事なるが如く、得意の君子は文明の日進を祝するものも多かるべしといへど、人心腐朽し風俗頽敗せることは日に甚しきものあり。専ら法律の文を誦し、好みて上に抗抵し、自由の権を主張して親密に保合すること能はず。活路の目的なきに苦みて、事変の生ずるを希ふが如き状あり。此際に当り変通適宜の政を施すこと能はずとせば、争か国家を泰山の安きに置き、大丈夫島の人物なりと称するを得ん。良法を設け北海に移住せしめ、全国の力を対馬・大島等の国防上に集め、千島の辺隅となく舟棋往来して大に進取の気を鼓舞するに非ずば、異人蜂起して兇行を逞うし、政府国会も如何ともすべからざる勢あるに至り、国計濫出するの弊あらんことを恐る。小利大損は理財の術に達するものに非ず。深く省せざるべけんや。

西伯里の鉄道は三五年を出ずして全く成功を告げんとす。甲薩克〔44〕軍隊の烏蘇里〔45〕地方に応援するもの一周日に過ぎずして、彼此に往来することを得ん。烏蘇里の地たる西は満州に連り、南は朝鮮に界し、東は大海に枕し、北は大陸を控き、位を我が土流に占めて数百千里の間に盤踞し、山川秀麗に土壌膏沃なること北海道に過ぎ、極めて耕牧に適し、露人が宝庫とする所たり。開闢より今日に至るまでは、久しく野蛮の域に附して豪傑の其間に起るを聞かざりしかども、今や露人を待て遽に積鬱の気を発洩せんとす。白皙人種の彼地に繁滋するもの日に多く、数十年を出でずし数十百万碧眼健児の縦横跳躍するを見んは勢の自然にして成吉思罕〔46〕・奴児哈赤〔47〕一輩の人物を出さんも此際に外ならざるべしと思はるるなり。露人が志は固より南

進して海上の大権を擅にするに在りて、意外に割処の地を得たるものなれば其地に生聚するものも常に侵略を以て性とし、数百里の山河を挙りて勇往堅忍の兵に非ざるものなきに至らん。沿岸に数百の大鑑を連ね、内地に精勁の肥馬を牧しながら、東南に睥睨し、我が日本国人の怠惰にして与み易きを知り、我が内外防禦の薄弱にして彗の乗ずべきものあるを見ば、争か蒙古の先例を追ひ先を争て長駆し一撃の下に全国を席巻せんと企つるものなきを得んや。我が邦人は古より露国を畏るること殊に甚しく、殆ど群羊の虎を見るが如き勢あり。一二慷慨の士が北門鎖鑰の説を陳するを見ても、露人の感情に対して如何と危ぶめるものあるが如し。露人は我が国情を知るに従ひて益跋扈し一雑夫が軍艦に在りて我に接するにも侮慢を極め、毫も顧忌する所なきほどなるに、我は此勢を見て益畏縮し閉息して気を吐くこと能はず。人をして生は死に如かざるの感あらしめんとす。去春巡査津田三蔵が精神錯乱の余りに兇行を露国皇太子に逞うせんとしたる〔48〕が如きも、従来の国辱を感慨したるより此の如き始末なりしやも知るべからず。是は全国人民が奴隷卑屈の域に陥り、決死の精神なきがため斯る禍を致したる結果に非ずともいふべからず。今日の状態にして奮発興起すること能はずとせば、此上にも何様の大患を生ぜんも測りがたし。今春の事は聖天子陛下が外交を重んじたまへる至誠に由り、幸にして無事に帰したりといへども、再び斯くの如き暴行などあらんには、露国は言ふまでもなく万国軍の海を蔽ひて至り、大罪を声することあらんも知るべからず。深く寒心せざるべけんや。北海道は今日の勢にて数十年を経過せば数十百万の生齒あるに至るべけれど、対岸なる烏蘇里地方にも同一の人員を出さんことは決して疑ふべきに非ず。今日我邦の精神気力を露人に比較せんに、既に霄壤〔49〕の別あるものの如し。我は今日に当り同胞の汚辱を受くるものあるを見ながら、胆を嘗め薪に臥する覚悟あるものなし。後世の此状を目撃するに慣れたるもの、果して能く外人を圧倒することを得べきや。殊に彼が教法の我が愚民の頭脳に浸染するあり。苞苴〔50〕の姦人を籠絡するありとせば、北海道を襲ひて青森の海峡を断ち、北陸道を突きて腹部の地に出没するなど茶飯常事となり、我が全国を股掌の中に愚弄するに至らん。英独諸国の来り窺ひて露国の妨碍を為さまく欲するものありといへども、常に事に及ばずして我国の憂は日に危迫となれば、軈て不忠不義の徒あり対馬を独国に貸し、大島を英国に鬻ぎ、千島を米人に与ふるなどの議を生ずるに至らん。斯くて一時の難を免るべしといへども、一たび力を人に借りたる已上は、永く彼が保護国となり、不羈自由の人民たるを得ず。埃及〔51〕となり土耳格〔52〕とならんことは殆ど免れがたかるべし。我が神州の赤子たるものにして一念の此に及ぶことあらば、安ぞ痛憤流涕せざるを得んや。今日のため慮るものは、全国を挙りて死地に入り、一村一郷ごとに各自に防禦し、老若男女となく悉く兵器を執りて出陣すべきものと覚悟せしめ、常に武技を以て博奕に易へて人生娯楽の第一とし、武技上達するものは富貴に日を渉ることを得べきやうに法度を立て、腕力勇壮にして一婦と雖も妄りに侮るべからざる風俗を養生し、尋常外人と接するにも毫も侵侮を受け泣寝入するが如き始末あることなく、家屋を造るも高夾の処に倚り、室中もしくは屋旁に深く穴ほりて多く土室を作り、平常は重器を蔵め置きて火災の患なからしめ、万一緩の時は兵器を執り土室に入りて砲銃を避け、賊の上陸するに至れば鼓声を聞きて一斉に挺出し、短兵接戦し奮死して屈せざるやうに経画したきことなり。又海岸要害の処などは言ふまでもなく、其他の諸処にても攻守に便ある場処を相

し多く樹竹を植え、障蔽を設け其中に倚りて弓銃を発するやうにし、或は深夜に乗じて敵を攻撃するの便を謀り、遠近策応して出没変化し、歳月を支へしむべし。外寇のため屈辱を受くることは何人も快しとせざることゆえ、平日より大義を以て人心を鼓舞し、忠勇剛毅の風を養成したらんには、国中の人心を一致せんことも極めて容易なるべく、大鉋巨艦の精修せるものなしといへど、防禦の洽からざるを患ふるには至らざるべし。今日に至り弘安の昔〔53〕を証し、神風云々の説を為さば、誰も笑はざるものなしといへど、当時人心の一致せるに由りて然るを致せるは誣ゆべからざるものあり。西班牙人が大軍艦を連ねて南洋ヒリッピァン群島の蛮民を征するに、蛮民ども其族を挙りて林莽に入り、各処に出没して銃撃しければ、西軍は死するもの多く、久しきを経れども降すこと能はず。終に外人を恃みて和を講ずるに至れること毎々に及ぶと聞けり。是等も弘安の昔を証するに足るものなり。余嘗て之がため小詩を賦したることあり。曰く「万国仰胡元、太郎気欲呑、神風鬢辺起、一撃走千軍」と。又曰く「西人征海島、連艦不能降、識得弘安歳、威名震外邦」と。極めて拙作なれど余が志を言ひたるものなり。英露の強盛なるは蒲人の比に非ずといへども、我も島蛮とは異なるものあるべし。我が邦人は慄悍〔54〕の風ありて持久に堪へがたき性質なれど、敵人に降服することを欲せざる精神なるは島蛮に過ぎたるものあるや必せり。在上の鼓舞によりて此精心を増長せしめんことは、甚だ難事に非ざるべし。況や弓箭剣槍は従来の長技たるに於てをや。平生より此等の諸技を講習し、事変に臨み隊を成し出陣せしめば、壮年輩が抜刀にても非常の功を奏するに至らん。婦人の肩尖刀を用うるにても、或は暴客を懼すに足るべきなり。風雨と深夜とに搆はず彼此応援し、賊の不意に出でて攻撃し、歳日を支へ艱難に堪へて防禦したらんには、如何に強悍なる敵兵といへど終には屈撓敗走するに至らんこと疑なかるべし。況んや斯る覚悟もて国防を厳にせんには何様の節倹も行はるべければ、大鑑大砲の必要なるものも容易に弁ずべきに於てをや。是は直に今日の一急務といふべきものの如し。今日危急の運に際しながら、幾十年の後に至るを待て海陸軍を厳修せんなどいふは、極めて迂闊の論なり。斯る心得にては幾十年を経て守備厳修するに至るとも、敵人の横行を制しがたかるべし。其は専ら外物を恃みて一心に奮闘せんといふ覚悟なければなり。況や外に向ひて名義を正うするに於てをや。

今日東洋の景況は果して如何ぞや。烏蘇里地方は古昔粛慎鞨靺〔55〕の地にて高麗三韓の属地なれば、曽て我邦に往来して朝貢を修めたる国人なるを、露人が万里の西より来りて其地に割拠し、意気揚々として我物視するを曽て誰何すること能はず。支那人は一己の生活を営むに勤倹忍耐の性ありといへども、国家のため冷澹にして外人の其地を奪略するを深く厭はざるほどなれば、其国の大祖たる奴児哈赤が興れる本国の周違を挙りて露人に附し、安枕高眠して毫も省覚することなし。是は既に太半は露人に降服して奴隷となるを甘んじたるものと謂ふべきなり。奴児哈赤は我が源義経が子孫なりといふものあり。義経が蝦夷に入りて夷婦を娶り子孫を長じ、後に柯太を経て満州に入るの話あるに拠れば、其説も虚なりといふべからず。清国の清は清和の字に本づき、本を妄れざることを表したる由なるに、猜疑深くして我を信ずること能はざれば、我が倚りて恃みとすべきものと思はれず。朝鮮は我に密迩して彼此の関係も尤も深く、古より干戈を尋いたること屢次なりしも、今より視れば兄弟の一家に在りて争へるが如き情実に過ぎざるを知らず、隠に情を露人に通じ、露人が財貨を貸して一時の

急を救はれんことを幸とするものの如し。好みて露の術中に陥らんとす。終に甘心もて露の管制を受くるに至らん。我国は東海に独立して隣国の恃むに足るものなきこと此の如し。英に与みせんか、露に与みせんか。二つのもの並に策を得たるものに非ず。議者或は曰く「英は東洋諸国の公敵なり。東洋の●慮るものは露米に約して英を伐つに如かず。露人をして志を欧洲に得せしめんは、東洋を棄てしむる所以なり」と。其言は聞くべきが如しといへども、僅々数年の間に能くすべきに非ずして、烏蘇里の沃壌は露人が容易に擲去〔56〕すべきものとは思はれざるなり。烏蘇里生息の露人は悉く本国に畔き去るとする我に●かば●して油断すべからざるものとす。安ぞ露人を与みすべしといふことを得んや。或は曰く「英は商業国にて東洋に関係すること尤も多く、我に利することも極めて広きがため、長く親みて露人を退すべきなり。」殊に知らず。英人の東方諸国を略するや、多方の奸策もて商業上の利を擅にし、長く治外法権を施さんとすること露人と相似ざるものあり。財貨を人に貸して其国を困窮せしめ、従って其改に関渉するなど歴々として誣ゆべからざるの（こと〔57〕）あるを、是安ぞ与みすべきものならんや。されば我邦今日のために言はれんには、更に良策の国を保つに足るものなしとせんか。我策の得たるものは不羈独立に在りて、名義の在る所に従ひて進退し、勢の強弱を見ずして大義を守り、尺土一民といへども務めて之を保護し、毫も異種異族の侵奪軽侮するを許さず。死生を天に委ね、死するも屈することなくして四隣に範し、漸く東洋諸国の元気を漸く白皙人種が臥榻の傍に鼾睡するを容さざるべきなり。四千万の同胞にして百万人も死することあらば、大に国威を張り、外人窺窬〔58〕の念を断つに足らし、斯くてこと大丈夫国と称すとも遺憾なかるべけれ、近年我国は既に人満を患へたり。人智の日に進めるや浮薄の風を生じ、終に造化の力を奪はんとして天変地妖を醸さんも測りがたし。凶年饑歳相続し、疫癘流行する等の事あらば、道路に幾百万の屍骸曝すものあらんとす。斯る状にて死し後に名なきは、国難に殉ひ大義のために斃れ、生気凛然と祠廟に存し豊碑に托して英名を後世に遺さんに孰れぞや。此風を養成せんとならば、今日より有志を鼓舞し辺疆に遣りて外人が無礼の状を目撃せしめ、一寸の山河は一寸の金といふ義を知りて大に奮励せしめ、或は其地の怨霊となりて呵護〔59〕せしめんに如かず。碌々として〔60〕東京に老死せんは、子孫の奴隷となるを見物するに異ならず。東京の花月に酔ひ優々として日を渉るものは其身の奴隷となるを知らざるなり。深く察せざるべけんや。

註

〔1〕勝ち負けのこと。

〔2〕韓愈の『争臣論』に「越人が秦人の肥瘠を視る」とあることに基づく。関係のないものとして全く意に介さないこと。

〔3〕こだわるさま。

〔4〕窺って入ること。

〔5〕黒海を指すと思われる。他にもアゾフ海と里海を並列で記述する史料もあり、黒海を里海と略記する例は確認済みである。

〔6〕「の地」の二字が重複するので削除した。

〔7〕欠点を指摘して非難すること。

〔8〕一八二二～一九〇二。漢学者。佐賀藩士。幕末期は志士として奔走した。『周易講義』などの書を残している。

〔9〕谷口琴盧。友人の秋永蘭二郎とともに岡本韋庵に働きかけ集義館を設立した。このとき谷口・秋永と岡本の間に立ったのが有井進斎であり、そのことについては『進斎遺稿』の秋永序に詳しい。

〔10〕一八五三～一九二二。海軍軍人。薩摩藩士。海軍及び水産関係で活躍すると同時に、大日本教育会・帝国教育会においても業績を残した。

〔11〕この部分の「コラール」のルビは岡本による。珊瑚のこと。

〔12〕重野安繹。一八二七～一九一〇。薩摩。明治の歴史学者・漢学者。

〔13〕何もしないで見物すること。

〔14〕自慢し見せびらかすこと。

〔15〕狡猾な小人と物事を害する悪人。

〔16〕両方にまたがって自分の所有とすること。

〔17〕【　】（筆者）について頭注が附されている。「明天子以下悲むなりまでの文字、激に失す。若し新聞に公にせば、必ず奇禍あらん。改むべし。」注釈者は不明。

〔18〕四方から集まること。

〔19〕取り締まること。

〔20〕ここでは不明な点について教えてもらいたい、の意。『論語』微子篇よる。

〔21〕かき乱して変更すること。

〔22〕弊害のある点のこと。

〔23〕「夫れ」と「奢侈」の間にあった「是は予算の剰余ありて使用すべき術なきに苦しめる上の結果なるにや。窮民を賑恤（しんじゅつ）せんとの意に出たるにや。在上君子の」が削除されている。これが岡本によるものか、校閲者（不明）によるものかは判然としない。

〔24〕暴君とされた夏の桀王、殷の紂王、周の幽王・厲王をさす。

〔25〕殷の紂王が象牙の箸を作った時、臣下の箕子がこの奢侈がエスカレートしてやがては国を滅ぼすであろうと嘆いた故事を、文明を知らない田舎者の説として嘲る、の意。

〔26〕白い絹のはかま。贅沢な衣裳を身につけた者の意。

〔27〕【　】（筆者）について頭注が附されている。「「　」削るべし。若し陸海軍士をして之を読ましめば、恐く先生を撃つ者あらむ。否らざれば法律に処せらるべし。」注釈者は不明。

〔28〕へりくだること。

〔29〕乞食のこと。

〔30〕同じ阿波藩出身者であるが詳細は不明。有井進斎の『論語論文』に序文を寄せている。また有井進斎・岡本韋庵・芳川顕正を「阿波三傑」と称した（有井『論語論文』岡本序）人物である。

〔31〕『孟子』梁恵王上に「梃を制して以て秦楚の堅甲利兵を撻（う）たしむべし」とある。小国であっても、経済・道徳を確立すれば、人民は義勇奉公し梃（棍棒）を持ってでも強国の秦や楚の軍隊に立ち向かっていく、の意。

〔32〕脚気が心臓をおかすこと。

〔33〕知覚が麻痺すること。

〔34〕歯の生え始める乳児のこと。

〔35〕養い救うこと。

〔36〕「闇中」では意味が通じない。「闇中」の誤りか。

〔37〕一時的な安楽や快楽を貪ること。

〔38〕「否」は『易』の卦の一つ。閉塞した状態をさす。

〔39〕「泰」は『易』の卦の一つ。安泰の状況をさす。

〔40〕守りのこと。

〔41〕思いがけない幸運を求めること。

〔42〕手足の先がくさる病気。

〔43〕岡本が堀基を通じて西郷を説得した件については『亜細亜之存亡』（哲学書院、明治33）・『大日本中興先覚志』（（中国）開導社、明治34）にも見える。前者については拙稿「岡本韋庵『亜細亜之存亡』について」（徳島大学国語国文学19、平成18）を、後者については「岡本韋庵『大日本中興先覚志』訳註（一～四）」（徳島大学総合科学部紀要言語文化12～15、平成17～19）及び「岡本韋庵『大日本中興先覚志』について」（徳島大学総合科学部紀要16、平成20）を参照されたい。

〔44〕この部分の「コサック」のルビは岡本による。

〔45〕この部分の「ウスリ」のルビは岡本による。

〔46〕この部分の「ジンギスカ」のルビは岡本による。

〔47〕清の初代皇帝太祖（在位一六一六～一六二六）。

〔48〕明治二四年五月一一日に起こった大津事件のこと。『千島日誌』に「十一日。早旦に凶徒津田三蔵が露国皇太子を斬りたるとの報を聞く。余は露囚となるを甘心すといへども、斯る奉動は深く悪む所たり。国家後来の始末を思ひて惨憺たること久しく……」とある。

〔49〕天地のこと。

〔50〕贈り物や賄賂のこと。

〔51〕この部分の「エジフト」のルビは岡本による。

〔52〕この部分の「トルコ」のルビは岡本による。

〔53〕一二八一（弘安四）年の二度目の元寇来襲をさす。

〔54〕すばやく荒々しいこと。

〔55〕原本は「鞨」を「鞨」に作るが、文意により改めた。「粛慎」は古代に今の松花江・ウスリー江・黒龍江周辺にあったツングース系の国家。「靺鞨」はその唐代の伝承。

〔56〕捨て去ること。

〔57〕文意により「こと」を補った。

〔58〕すきをうかがうこと。

〔59〕しっかり守ること。

〔60〕平々凡々として、の意。

おわりに

最後に両書から今後の課題としていくつか言及しておきたい。

まず注目したいのが山岡鉄舟の大和会に言及する次の部分である。北海道開拓の重要性を述べた上で、北海道人（アイヌ民族）を「単純なる日本人」にせねばならないと説き、

> 之を行ふが為には、彼の鉄舟山岡公及び其他の憂国諸公等の創立に係る大和会なる者は、我が国教を元素として至誠の大義より成り立てる結社なれば、其元素則ち日本の元気たる大和魂を以て彼等の悩随に注入するは結然たる日本の良民を育造するに於て最適切なる手段なりと信ず。是に由て吾人は其会の承認を得て、北海道の中心に一分館を設立し、其主義を以て或は懐け或は救ひ、而して又一方に於ては丁壮を集めて兵法を操練し、草荒を開拓して農林を興し、壙鉱を採って、販路を通し、以て四民の公益を計り、人心の方向を一完して至仁なる王澤に浴せしめば、魯人の手も将に下す所あらざらんとす。（『国防』）

至誠を旨とする山岡鉄舟設立の大和会が、アイヌ民族に大和魂を注

入し、良民へと改造するだろうと言う。そして本会は天皇を格とする神道を奉るものであるから、次の兵農の投入を合わせれば、開拓者たちも天皇の恩沢に浴することとなり、キリスト教排斥にもつながると言う。岡本は『耶蘇新論』（哲学書院、明治二六）の中で、キリスト教倫理と儒教倫理を比較し、キリスト教を国体にそぐわないものとして排斥している。これに反し、アイヌ民族の中では露・英によるキリスト教による教化が進んでいた。岡本と本会の関わりについての詳細は今後の課題である。

また谷口蘭田の四男復四郎と起こした集義館の一件にも注目したい。以下のような記述が見える。

> 余嘗て琉球の属地なる八重山列島中に林莽穢雑して人跡の至らざる所多く、内地数万の人民を遷して其地を拓開し、砂糖等を耕作するときは漸く莫大の利益を起すべしとて、老友佐賀県の谷口藍田が男復四郎の其事に尽力したるを聞き、復四郎と議して企図したる集義館雑記の序に其説を掲げたることあり。復四郎は間もなく死し、其事も中絶したりしが、是も国人の軽視すべからざる所たるを感ぜしがため……。（『海防』）

この谷口復四郎と集義館については拙稿「有井進斎の人と思想」（凌霄（四国大学）16、2009）の中でも少しく言及したが、ここではまず、その際触れなかった沖縄関連のことに言及しておきたい。明治一七年に三二歳で病没した復四郎の墓碑銘や行状（谷口中秋「琴廬谷口君墓碑銘」「谷口復四郎行状」）によれば、復四郎は明治一二年七月に沖縄県令となった旧佐賀藩主鍋島直彬に従って沖縄へと赴いている。そして直彬の後任として上杉茂憲が着任した後も沖縄に留まり、明治一六年まで沖縄で奉職している。沖縄県民のために尽力し、「心を尽して撫恤す」「土人の信任する所と為る」（ともに墓碑銘）などと記されている。またこの間に宮古・八重山など諸島を経巡ったようで、『蘭田谷口先生全集』（大正一三年、非売品）の巻五附録に収録された『琴廬遺稿』の中の「球遊詩史（前集・後集）」「巡島百首節」をひもとけば、復四郎がいかに精力的に各島に目配りしていたのかがよくわかる。この時の見聞を岡本に語ったのであろう。そして、その内容が『海防』と『拓殖』の詳細な南洋諸島の記述に反映されたと考えてよかろう。

次に『進斎遺稿』に復四郎の旧友秋永蘭二郎が寄せた序文を見てみたい。

> 是に於て進斎を推して盟主と為し、集義館を設け以て講学の所と為す。又大に国史を編纂し、将に以て名教を一世に渙発し、正気を千載に維持せんとするなり。当時の有司、往往にして其の事を賛襄す。而して世の斯の道を志す者あらば、靡然として之に応ず。一年を出でずして集義館の名は大いに振ふ。既にして有司遷り代はり、時勢一変す。同志は四方に離散し、琴廬も亦病没す。勢支ふべからずして、館遂に廃せらる。爾来、余は進斎・韋庵と相見ゆる毎に、未だ嘗て口を開きて大笑し、天を仰ぎて長息せずんばあらざるなり」（『進斎遺稿』秋永序）

ここに見える集義館は「国史を編纂して、それによって儒教の名分の教えを世の中に知らせ、正気を末永く国民に持たせよう」という目的が記されており、『海防』に記されている集義館とやや性格

を異にしているようにも思える。あるいは多様な議論を交わす場だったのであろうか。また『日誌』には次のように見える。

七月一日。……裁判所属吏村田綱之助来訪せり。肥前の産にて谷口藍田が門人たり。此人は数年前に当り、肥前の谷口復四郎・秋永蘭二郎と謀りて崇文会を設立したる時に社員となりて尽力したるものなり。北海に住し実業を起さんと欲し、暫く此に官たるなりといふ」（『日誌』）

ここには崇文会とあり、集義館との関係や会の活動内容が判然としない。これも今後の課題としたい。

最後に本稿はじめにおいて少しく言及したが、『国防』を講演した林祥院（麟祥院）厚生館の件について少し補足しておきたい。岡本は井上円了の哲学館では講師として教壇に立っており、哲学館講義録の中の『儒学―孔孟学・老荘学』（明治21）・『支那学―経学』（明治27）は岡本の手になる。

ただし、哲学館が麟祥院にあったのは明治二〇年から二二年の間で、この講演が行われた二四年当時は駒込の蓬莱町にあったから、仮にこの林祥院が麟祥院であったとしたら、旧縁をたよってということになる。ちなみに哲学館が現東洋大学のある白山に移ったのは明治三〇年のことである。井上円了との交流は深く、明治二四年に岡本が千島に赴く際にも壮行会を催してもらっている。今後より詳細に検討してみたい。

＊

以上本稿では岡本韋庵が明治二四年に著した『北地国防論』と『北地海防論』の二冊を紹介した。そこには岡本自身が同年に調査した千島諸島・北海道の開拓の現状、及び谷口復四郎より聞き及んだ琉球諸島の現状をもとに、英・露を中心とした西欧の経済・軍事・宗教三方面からのアジア侵略への対応策としてのいわば僻地開拓論が展開されていた。

岡本の主張は政教社メンバーのそれとの関わりが強い。拙稿「『千島日誌』に見える岡本韋庵の北方移民論」に於て福本日南や志賀重昂の南方移民論とのかかわりに少しく言及した。また、日本の対朝鮮・対清政策の方向性については陸羯南が同時期に「日本」の社説で述べるところに近似している。さらに谷干城との交際もあり、『日記』にも「（十月）廿三日。……午後、谷氏を訪ひ、有力者を合して四辺に貿易し、荒蕪を開拓するの説を陳す。谷氏、大に許諾するものに似たり」とあり、千島義会の特別賛成会員にもなっている。

先に示した問題点とともに、人脈の上から岡本の思想の特質を明らかにしていく段階に入った。

―参照文献―

佐藤能丸『明治ナショナリズムの研究―政教社の成立とその周辺』（芙蓉書房出版、1998）
井口和起『日本帝国主義の形成と東アジア』（名著刊行会、2000）
広瀬玲子『国粋主義者の国際認識と国家構想―福本日南を中心として―』（芙蓉書房出版、2004）
李彩華・鈴木正『アジアと日本―平和思想としてのアジア主義』（農文協、2007）
朴　羊信『陸羯南―政治認識と対外論』（岩波書店、2008）